

浮気防止のために絶倫旦那と同じ部屋に泊まったら、妙な玩具で前立腺が雑魚になるまで開発されたんですけど

浮気性ドS妻持ち社長×脱力系不憫リーマン

体験版

受け：南雲（なくも）

攻め：北大路（きたおおじ）

要素：おじさん攻め、媚薬、拘束、玩具、エネマグラ、前立腺責め、乳首責め、電気責め、言葉責め、結腸責め、放置、連続絶頂、淫語強要、潮吹き

社内メールで大至急の呼び出しがかかった。どうせが碌なことじゃないと脳内に警告が鳴り響く。でも俺は社長に背く勇気はないので、渋々社長室に赴くしかない。ノックしてドアを開けると、今日は一段とばっちりキメた女社長が、パッとこちらに顔を向けてくる。

「来たわね南雲。アンタに業務命令よ」

「なんすか。言っときますけど俺、アンタの旦那関連のことは——」

「察しがいいわね。その旦那と、今日だけ同じホテルに泊まってくれない？」

「...意味が分からないんですけど。部屋はさすがに違うんすよね？」

「もちろん一緒よ」

「とりあえずなんでそうなったのか、詳しく説明してほしいっす」

華やかな髪型に、明らかに余所行きが予想される格好をした社長は、テキパキと手元の仕事をこなしながら、俺に課す業務命令の詳しい説明をしてくれた。

社長からは以前、浮気癖のある旦那さんの見守り役を頼まれた。前回は社長が出張中、自宅での監視だったが、今回は向こうが出張らしい。どっかのお偉いさんたちが集まるパーティーが開催されるので、宿泊先のホテルの部屋を根回しすることで、浮気を未然に防ぎたいようだ。

確かに遠方開催、しかもホテル泊となれば、彼女の旦那さんでなくとも浮気の可能性は高くなる。とはいっても、人生の中で最も過酷な1週間を体験した俺としては、はいそうですかと引き受けたくはない。

「一緒に部屋に泊まることになっても、100%浮気防止ができるとは約束できないっすよ。キャバ嬢とかと一発やるなら、別のラブホに行くかもしれないじゃないっすか」

「来る人も社長たちよ？既にそういう女は会場にセッティングされてる」

「そのまま自分の部屋でやるに決まってるってことすか」

「そういうことになるわね。それに、もしもアイツが外に出そうになったら、南雲も付いていったらいいだけのことよ」

しかし俺の意見は木端微塵にひねりつぶされて、無茶しか言わない社長からは一通の封筒が渡される。中身を見てみると、どうやら招待状のようだ。

「私も行ければ行くつもりだったけど、先約はつぶせないわ。というわけで私の代理と、アイツの虫避けよろしくね」

じゃ、と立ち上がる彼女は、キラキラのオーラを纏って話を打ち切った。忙しい女社長は、夫婦そろっての出席よりも、自分の利益になる何かを優先したらしい。そんなに旦那の浮気が心配なら自分で行けと言ってしまいたいが、言ったら首が飛ぶので飲み込むしかない。

最悪だ。俺は例の1週間で、自分の尊厳がずたずたにされたというのに。まさか遠い地で男2人、ホテルに泊まることになるろうとは。しかも日付が明日なのも急展開過ぎる。

とはいっても、社長命令には逆らえない。なのでこうして俺は、体のいい虫よけスプレーとしてパーティーに参戦することになってしまった。

そして迎えた当日。同じ部屋に泊まるので、先に付いた俺が部屋で北大路社長（旦那）を待っていると、スーツケースを引いた彼は、げんなりした顔で俺を見てきた。

「嘘だろ、マジでいるじゃんかよ…」

「どうも。奥様の代理として本日参加させていただきます、南雲です」

「アイツの代わりはまだいい。お前が俺と一緒に部屋なのはなんでだ？」

「夫婦で来るってことになっていたので、部屋は一緒と聞いてるっす」

「あの女…！姑息な手を…」

チッと盛大なため息をつく男前は、今回の浮気防止ターゲット。この人に俺は先日、身体を拘束され、無理矢理に何回もイカされ、知りたくもない後ろの快感を覚えさせられた。男の俺でも無節操に犯してくるし、何より絶倫だし、倫理観も死んでいるので、嫁であるあの人が心配するのは分かる話でもある。ただし過去の記憶があまりにも悲惨すぎるので、彼のお目付け役係を率先して引き受けたいとは思わない。

そしてもちろん、この気持ちは北大路さんからしても同じことだ。俺という厄介者が、いろんな意味でやり手の彼に快く受け入れられるわけではない。やることをやるつもりで来ている北大路さんは、身だしなみを整える準備をしながら文句を言ってきた。

「おい南雲。同じ男なら、今日が開放日ってことぐらい分かるだろ。金やるからしれっと抜けろよお前」

「気持ちは分かりますけど、バレたら俺が殺されんすよ」

「まあアイツ、怒ると怖えもんなあ…」

とはいえ、俺たちは怖い女社長から、キツすぎる牽制球を常に投げられる立場ではある。その点では苦勞が分かるので、お互いにため息をついて肩を落とした。だけれどスーツと髪型を整えた北大路さんは、どこからどう見てもバチッと輝くイケおじになるので、社長の心配にも頷ける部分はある。

あと、浮気防止対策として俺は出席しているわけでもあるが、パーティーにはこちらの会社の代理で出なければいけない。なのでうまいこと名刺を配っては、最近の社長の活躍ぶりを上手に褒め、時に北大路さんを確認するという、大変面倒な時間を過ごした。ある程度食事や飲み物は取れたけれど、1秒も気を抜けない時間に、俺は結構疲勞を感じていた。

けれどおかげさまで、北大路さんの不届きな行動は少々で済んだ。女を寄せ付けることなく部屋に連行するのにも成功したので、評価としては最高ランクに違いない。横からは「ふざけんな」「ねちねち野郎め」「番犬は大人しく家で待てろ」などの小言が飛んできたけれど全てスルーだ。

「よし、無事に帰ってこれたっすね」

「全然無事じゃねえんだよ。一人も持ち帰らせないってどういうことだ？」

「そのために来てるんで諦めてほしいっす。じゃあベッドはツインですけど、俺はソファで寝るんで。2つとも好きに使ってください」

「は？別にそこまで気い使わなくても、隣のベッドで寝ればいいだろ」

「あんな被害にあった俺が、アンタの横ですやすや寝れるとでも？」

けれども問題は、この後部屋で2人きりになることだ。嫌な記憶がある俺としては、極力北大路さんとは近づきたくない。物理的な距離を保つことは非常に重要

だし、隣で寝るなんてもってのほかだ。だからとにかくさっさとシャワーを浴びて寝てくれと、無言の圧を飛ばしまくる。

だが俺程度の人間のプレッシャーなんて、この人からしたら知れている。なのでダメージを全く負わない北大路さんは、ジャケットとネクタイを取ると、さっと冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

「まあそんなカリカリすんな。かわいそうな男に一杯ぐらい付き合えよ」

「会場で飲んだのにまだ飲むんすか」

「あんな気い張ってるところで飲んでも酔えねえしな」

多分飲んだら金がかかるタイプの飲み物ではあるんだろうけれど、彼が手に持つのは、見た目は普通の缶ビールだ。2つのグラスにロング缶からビールが注がれるのを見て、へえ、北大路さんってこういう庶民的な酒も飲むんだとぼんやり見ていたが、立場上一自分が注ぐべきだと気づいて、慌てて役割を交代しようとした。

「おおおお、俺が注ぎます！」

「いいよ、そういうの。はい、乾杯」

でも一步遅かったなので、既にグラスはビールで満たされていた。半ば一方的にグラスをぶつけた北大路さんは、ぐっと中身を一气飲みしてから、シャツのボタンを上から2つほど開けていた。

ふう、と一息入れる彼のグラスに、今度こそビールを注ぎ入れる。さんきゅ、と言って再び飲み始める北大路さんも、少し疲れが見えるような気がした。やはりやり手の社長と言えど、こういう場では緊張するものなんだなと、成功者の影の苦勞を知る。

そしてそんな時、俺の仕事用の携帯が鳴った。時間的に緊急連絡のようなので、断りを入れて電話に出る。部屋から出るわけにはいけないので、2人で座っていたソファから少し離れたところで電話を取った。それから明日以降の仕事の打ち合わせをして電話を切る。

「電話何？アイツの会社なんかヤバいの？」

「いや、そこまでじゃなかったっす。ちょっと対応はしないとっすけど」

「あっそ」

一応俺の仕事＝嫁の会社の仕事という認識はあるのか、若干心配してくれるあたりはさすが旦那様だと思えるべきなのか。それともしれっと2缶目を開ける彼からしたら、実はそこまで興味がないのか。そのあたりは読めないなと思いながら、俺もいただいたビールを飲んだ。

けれど、いつもならこんなグラス1杯のビールで酔うはずがないのに、疲れているのか一気に酔いが回ってきた。嘘だろ、確かにパーティー会場でも飲んだけど、そんなに多くはなかったのにと、額に滲む汗をこっそり拭う。しかも経験上、過度に酔ったなら吐き気がするはずなのに、熱っぽいのも変だ。もしや普通に風邪なのか、こんな時に困ったと、俺は立ち上がってまずは水を飲もうとした。自分用で買ってきた水が、冷蔵庫には冷えているはずだ。

「すいませ...！俺、ちょっと、水...」

気のせいだろうか。なんだか呼吸も苦しい。ヤバい、本格的に熱がありそうだ。これは早めに寝た方がと思いながら腰をあげたら、なんとそのまま床に崩れてしまった。うわ、めちゃくちゃ格好悪い、絶対馬鹿にされると思って、北大路さんを見上げる。

でも視界の先にいる北大路さんは、確かにニヤついていたんだけど、俺を馬鹿にしているのとはもっと違う顔つきだった。どちらかというと、仕掛けていた罠にまんまと獲物が引っかかって笑っているような、そういう顔だ。

「お～、さすがに良く効くなあ。会場では使うなって言われてただけはある」

「っ、き、くって、何が...？」

「本当は別の奴に使おうと思ってたけど、部屋まで来られたんじゃあ無理だからな。内輪で使ってる貴重なお薬、南雲君に使っちゃったよ」

へらりと笑う北大路さんが、俺の腕を掴んで引きずる。その先にあるベッドに寝かせてくれるのかと思いきや、彼は俺を床に放って、自分のスーツケースを広げ始めた。

「アイツから、『私は行けないから代理を用意する』って言われた時、お前が来るかもってことは想定してた。そん時は徹底的に監視されるだろうから、お前で遊ぼうと思ってたんだよ」

「い、嫌だ、なんでそんな」

「楽しみにしてたイベントぶち壊したんだから、それくらいの代償はあるべきだろ？」

彼のスーツケースからは、明らかに宿泊には不要そうなSMグッズが飛び出してきた。マットレスに固定するベルトが上下に巻かれると、そこに手枷と足枷が付けられる。まずい、めちゃくちゃまずい、しょっぱなからガチガチに縛って何かをされると思った俺は、動かない身体で這ってベッドから遠ざかる。

「おいおい何してんの南雲。特設会場はそっちじゃありませんけど？」

「む、り、もうアレは、嫌だ...！」

「まあまあそう嫌がるな。一張羅汚すのは勘弁してやるから」

「ッひ!？」

でも、薬によって動きを緩慢にされた俺に勝ち目はない。準備を終えた北大路さんは俺をひっ捕まえて、シャツもスラックスも、下着も靴下も全部はぎ取っていく。その際しれっと熱を扱かれたせいで、先走りをカーペットに零す自分が何とも情けなかった。

「うは、ああ、や、だ、触んなああ...ッ！」

「南雲君たら、もう気持ちよくなっちゃってんの？相変わらずエロいねぇ？」

「ん、んっ、っく、あ、はああううう...！」

気持ちよくなんかなりたくない。なのに頭はぼうっとするし、声を我慢しようと思っているはずなのに、勝手に息が荒くなる。こらえきれなくて前かがみになったら、四つん這いで北大路さんに腰を向ける格好が、あまりにも弱者のポーズで泣きたくなった。なのに彼の手で熱を包まれて、にゅくにゅくと扱かれたり、人差し指でカリや亀頭を撫でられるのが気持ちよすぎて、甘い声が止められなくなる。

「ひう、っ、あ、だ、め、だめ、んも、お、やだああ...！」

「まだ始まってもないって。でもそうだな、お前も早く向こうに行きたいよな？」

「うあっ！」

ずりゅんと一度強くこすられると、ガクンと腰が揺れて、全く力が入らなくなってしまった。そのまま細かく息をしているうちに、無理矢理ベッドの上に投げ飛ばされて、手を頭の横に、足も伸ばした状態で拘束されてしまう。バンドに装着された手枷と足枷は、かなり頑丈に固定されていて、ひじや膝は軽く曲げられても、それ以上に動かすことはできなかった。

「こ、んな...！最低、最低っすよお...！」

「今は最低でも、すぐに最高に気持ちよくしてやるから安心しろって」

一応補足を入れると、確かに北大路さんは節操無しのドS絶倫オジサンではあるものの、俺を殴ったり、首を締めたりして苦しむ様子を楽しむタイプのSではな

い。それだけは唯一の安心材料ではある。ただし俺が死ぬほど感じることをしてくるのは間違いない。そんな彼が、見たこともない真っ黒なバイブのような物を手に持っているのは、俺としては恐怖でしかない。

「な、に...？なにそれ...！」

「ああこれ？これはエネマグラ。男がよがるバイブみてえなもん」

「女抱く前提でそんなの持ってくんな！」

「だから最初に言っただろ？お前で遊ぶ可能性も考えて用意してんだって」

はは、と軽く笑う北大路さんは、俺が嫌がろうと関係ない。なので尻の孔とエネマグラにたっぷりローションをかけた後、まずは俺の熱の根元に玩具と繋がるシリコンの輪をかけた。それからバイブより少し細いけれど、単調にまっすぐではなく、軽く曲がっている黒い部分の中に入れていく。波上に太くなったり細くなったりしている部分は、しっかり入れると俺のいい場所に太い所が当たってムズムズする。あと、熱の根元と挿入された部分の間にも謎のでっぱりがあって、会陰が押されてちょっと変な感じだ。

「ん、ふ、ふっ、ふう...！」

「よしよし、しっかり入ったな。飲み込み早くて助かるわ」

「や、っ、こんな、嫌だ...！」

エネマグラそのものは、表面がつるんとしているし、太くもないから特に痛みはない。でも今の段階で、ピタッと前立腺にフィットしているエネマグラに、永久

にいい場所を押されると思うと少し怖い。ちょっと足を閉じたり開いたりしても、軽く身をよじっても、一切ズレそうにないのもよくない気がする。

だけれど、俺の絶望はまだ序章だった。自由な北大路さんは、俺に薬を盛って、動けなくして、エネマグラまで入れておいてとんでもないことを言うてくる。

「じゃあ俺、シャワー浴びてもうひと飲みするから」

「は！？」

「これ、俺の呼び出しスイッチな。ボタン押したら来るから、南雲がど〜〜〜し
ようもなくなったら呼びな？」

俺はてっきり、これからすぐに北大路さんに責められるものだと思っていた。なのに彼ときたら、俺の手に2個くらいボタンがついているスイッチを握らせて、本当に風呂場に向かってしまう。

いやいや、ふざけんな。本気で風呂に入ってるじゃねぇよ。でも俺を縛って逃げられなくしたうえで、外に出られるよりはマシなのかと、複雑な気持ちで姿の见えない変態ジジイを睨む。幸い、この部屋で俺に構っているうちは、彼が浮気をする心配はないだろう。とはいっても、ただただ言いなりになるのはごめんだった。

「く、そ...！も、なんだよ、これっ...！」

北大路さんが風呂場にいる間は、特に自分の動きを見られる心配はない。だから最低限、中に入る玩具の位置だけでも変えられないかともがいてみる。手足はほ

とんど動かせないが、若干腰を浮かせたり、膝を内側に曲げたり、身をよじることはできる。だから今ピッタリと前立腺に張り付いている先端だけでもどうにかと、みっともなく身体をくねらせた。

「んふ...っ！ふ、っく、うう、やなとこ、当たるって、これ...！」

けれども懸命に位置調整を計ったものの、あまり有効策ではなかった。やはりシリコンのリングが根元にかけているからか、動いても位置はほとんど変わらない。だったら次は、恥ずかしいが自分の後ろに力を入れて、いきんで玩具を外に出してしまおうかと思った。手足が使えないのは北大路さんも知っているはずなので、自然と出てしまう分には不可抗力だろう。

そうだ、抜くなとは言われていないのだから、自力で押し出してしまえばいい。でも見た目はかなり情けないので、あの人が浴室にいる間にとっとと終わらせる必要がある。

「ふう...、ん、んんっ...！っく、はあ、はあ、はっ、あううッ！！？」

一度深呼吸して、まずは力を抜く。それからぐっと腹に力を入れて、思い切り中のものを締め付けた。ただしこれが、思わぬ作用をもたらしてしまう。

形が特殊だからだろうか。表面は滑らかだったのですぐに抜けるかに見えたエネマグラは、むしろ深く俺の前立腺に食い込んだ。咄嗟にぐんと腰が上に浮く。まずい、これは一旦休憩だと、俺は慌てて尻に入れていた力を抜いた。

「ふはあ...ッ！は、は、はっ、ん、だよ、これ...！？くそっ、押すな、あ、あっ、ひ、や、っ、うう、んんん...！？」

ただ、このエネマグラの凶悪さはこれだけじゃなかった。脱力したことで、どうにか中に入っているでっぱりが俺の前立腺を押し込む時間は終わった。けれど今度は、くん、くん、と俺の中の動きに合わせて、会陰側のでっぱりが動く。それはそれで気持ちがよくて、今度はつい感じて中に力が入る。

「うく、う、や、あ、あっ、ひ、っ、っっ！？な、ああ、まっ、これ、あ、ああ...！？」

きゅんと後孔が締まれば、前立腺を狙うための先端が一点集中で中を刺激する。それが嫌なら力を抜くしかないけれど、そうすると会陰側が本領を発揮してしまう。まずい、これはまずい。どうあがいても感じる。ヤバい、これって続けるほどに感じやすくなるかもと、一人肝を冷やした。

とにかくこれは、意識しないのが勝ちかもしれない。自力で抜き去るのは諦めよう。そのかわりに、刺激が最低限になるよう工夫した方がいい。深く息をして、どうにか腰を浮かせたり、内股にしてどうにかやり過ごそう。そう思って俺にできる努力をしてみるのに、くに、くに、とまるで意思を持つように動くエネマグラが、俺の前立腺を捉えて離してくれない。

「んんっ、んっ、う、うんんッ！は、はああ、っ、っ、〜〜っ！」

段々声が大きくなって、感じ方も激しくなってきた。最悪だ。前回の1週間ではこれより見た目がグロテスクなバイブも入れられたりしたから、最初はこの程度なら耐えられるかと思ったのに。なんなんだよエネマグラって玩具は。男泣かせすぎるだろうと、肘を曲げて快感に耐える。しかも時々、ぐんっと思い切り押されたりするから、その時に中を自分で締め上げて、余計に感じてしまって悔しい。こんな貧相な人工物一つで、あの変態の思い通りになる自分も悔しい。

「んくうっ！ひぁ、あ、あう、ッ、っ、あ、あ、あぁっ...！」

「おいおい、一人で楽しみすぎだろ南雲。風呂場まで声響いてたぞ？」

「ッッ！！？」

けれど俺が自分と葛藤している間に、北大路さんは風呂から出ていたらしい。バスタオルで乱雑に髪を拭く彼から、茶々を入れられて顔が熱くなる。咄嗟に北大路さんのいない方に顔を逸らしたけれど、そんなのが何の意味も持たないことは分かっていた。

「どう？そろそろ俺にかわいがってもらいたくなかった？」

「っ、だれ、が...！」

「あらあら南雲君ったら強がっちゃって。まあいいわ。気が変わったらそのボタンで呼べ」

上等そうなスリッパの音を響かせてこちらに近づく北大路さんは、軽く俺を見て煽った後、へらへらと笑って再びソファの方へと戻っていった。新しい缶が開く

音と、深夜番組の音が聞こえてきたので、彼が風呂場にいた時とはまた違う緊張感が俺を襲う。

さっきまでは誰も俺を見ていなかったから、ある程度恥ずかしい行動を取っても問題なかった。でも今は、すぐそこに北大路さんがいる。俺の痴態も声も筒抜けである事実、心が追い込まれていく。

それなのに、感じ方は強くなっていた。しつこく挟られ続ける前立腺は、絶対過敏になっている。というかそもそも、変な薬に感じやすくなる効果があってもおかしくない。

「ふ、ふっ、くうっ...！ん、っう、う、ううんッ！」

こうなると、今度は我慢比べだった。自分から嫌だと言って、かつ散々煽られた手前、俺からかまってくれと言うのはあまりにも癪だ。来るならあっちから求めてこいと、俺は耐えることに専念した。なるべく声も抑えて、目を閉じて、時間が過ぎるのを待つ。

でも、やはり耐えようと思っても、敏感な場所を一生押され続けているわけだから、時間経過と共に快感は増す一方だった。しかも俺がたまに声をあげても、北大路さんが無反応なのも腹立たしい。あの人、俺が呼ぶまでちょっかいを出さない気だなと、背を向けた悪魔を睨む。

「は、はあ、はあ、あ、ンンうっ！っひ、あ、あ、え、あ、あっ、あ...！？」

そして悪いことは重なるもので、ここに来て中の玩具から得られる快感が一段階上がった。さっきまではギリギリ耐えられるかと思える快感だったのに、今になって下腹が切なくなってきた。淡々と迫る中イキの気配に、俺は一人怯える。

「んひ...！ひっ、あ、あ、や、いやだ...！なっ、あ、こんな、ううう、んっ、ううんっ！」

射精と違って中でイクと、ぶわあっと指の先まで快感で犯されて、思考すら止まってしまう。しかも熱が引き切るまで長いし、連続でイケてしまうのも良くない。その上今回は、いい場所を延々と責められるおまけが付いている。一度イッたら終わりなのが分かっているからこそ、ここが正念場だった。もはや北大路さんが見ているかもしれないとか、声が丸聞こえだとか、そんなものに構っている余裕はない。

「んぎっ、ッ、っく、ううううう...！ふう、ふうっ、ん、あ、や、だ、まだ、あ、あ、うう、んんんっ！」

ガクンと腰が浮きそうになるのを必死でこらえる。今、思い切り中に力を入れたらおしまいだ。なるべく力を抜くんだ、深く息を吸うんだと、自分に言い聞かせる。ぎゅうっと足の指が丸まっては、だらんと伸びた。は、は、と、意識しても短くなる息が苦しい。

キツイ。というか変に我慢している分、中イキしたら溜めた分が一気に来そうな気がする。それでも諦めるわけにはいなくて、悔しくて、何に耐えてるのかも段々分からなくなって、目からは涙が溢れてきた。

「ふっ、っぐ、う、うううん！んはっ、は、あふ、んんんンッ！ふうう
う、ッ、っひ、あ、やだ、だめ、だめ...ッ！」

ガクガクと、内ももが震えていた。それは自分で耐えることのできる限界が迫っている証拠でもある。ぎゅうんと内側に力が勝手に入ってしまうのを、自力で耐えられるのはあと何分くらいだろう。

ぐ、ぐ、とお腹に、特に下腹部に力が入る。それを押しとどめるために息を吐く。でもそうすると、会陰のでっぱりが俺の切ない場所を外から押し込んでくる。やめろよ、中も外もいじめてくんなよと、どうにもならない下半身を見た。すると、ありえないくらい勃起しているのに、根元が軽く締まっているのと、前側の刺激がないせいでイケない熱が、自分の腹に水たまりを作るくらい先走りを零しているのが見えてしまう。そこで受けた精神的なダメージが、俺の最後の引き金を引いてしまった。

「~~~~っ...！も、嫌、やあゝ あ...！あは、は、あ、あゝ ああっ！や、待って、だめ、ダメダメ、っく、うううううッッッ！！！！？」

やらしい、マジでやらしいことになってしまったのが良くなかった。一瞬の気の緩みで、どうにか保っていた筋肉の維持がおろそかになる。ぐん、と腰が浮い

たのが見えた。連鎖して内側にも力が入る。その分強く前立腺を刺激されて、我慢していた何かが弾けてしまった。

じいんと、お尻の中全体が切なくなる。それから腰にかけてぞわぞわが一気に広がって、手が付けられない快感は背骨から全身へと運ばれていく。ビクンッと跳ね上がったまま戻れない身体に、長時間かけて蓄えた快感が広がっていった。

「ふぎ、い、いあああっ！！ああっ！っ、あ、だめ、まだだめ、今ヤバ、あう、うう、んんんっ！！？」

けれど、中イキの最中もエネマグラによる攻撃は続く。むしろ、イッている間の方が強い。グリグリと生き物のように俺の中で前立腺を押す玩具は、的確に一点を刺激する。ふざけんな、今だけは押しちゃだめだろうと身をよじっても、もちろん位置が動くことはない。

「や、ダメダメダメ、また、またイッ、っぐ、ううううっっ...！！んふっ、っ、あゝ、あっ、やう、うう、なんで、あ、あ、も、嫌だ、やあああっ！！」

縛られた四肢が、枷の金属を大きく揺らす。本来ならベッドが激しく軋んでもおかしくはないのに、上等な作りの寝具は俺の力を吸収する。それは俺の身体の負荷を和らげてくれるのかもしれないが、大事なのはベッドの柔らかさじゃない。イッてもイッても、前立腺を押し続けているエネマグラの方を重要視すべきだ。

腰を浮かせたらとか、尻を左右に揺らせばどうにかなるとか、そういう逃げ道はない。さっき北大路さんが風呂に入っている時に、全て検証した。だからこそ、俺はいかに自分が厳しい状況にいるかを分かっている。

「んひいいいゝ いゝ ッ...！っひ、あ、あう、んんんっ！っく、う、うっ、～
～～っ！！」

さっきから、尻の中の痙攣が収まらない。きっとこの悪魔の玩具を抜き取らない限り、俺は延々とイキ続けてしまうだろう。連続で絶頂している途中、かは、と詰まった息が出た。始まってから1時間も経っていないのに、身体が根を上げ始めている。

もしも両手が動くなら、すぐさまエネマグラを抜き去っているというのに。こり、こり、と俺のいい場所を、的確にもみくちゃんにしないでほしい。せめて位置はズレろよと、意思のない玩具に苛立つ。ただしその全てが無意味なので、俺は悲しい気持ちで後ろを向く彼を見た。

自分の手が使い物にならないなら、北大路さんに抜いてもらうしかない。正直、イキまくりの俺を見て、北大路さんが何もせずエネマグラを抜き取るかは賭けに近かった。より酷な状態に追い込まれる可能性もある。だけれど、今のままを選択したら狂ってしまう。ならばやるしかない。

ただ、口で呼ぶのはあまりにも腹立たしいので、俺は最初に渡されていた呼び出しスイッチを押すことにした。上下に2個あるボタンのうち、どちらが何の意味をもつのかよく分からない。だから俺は、そのボタンの役割を深く考えなかった。良く分かんないけど適当に押せばいいやと、上にある方を押す。

この見境のなさが、すぐに俺を追い詰めることになるとも知らずに。

「うはああッ！！？っえ、や、ああああああ！！！！？」

スイッチを押した途端、なぜか俺の中のエネマグラがいきなり震え始める。なんだよ、どういうことなんだよと、俺は慌てて2回ほどまたスイッチを押してしまった。そのせいでなぜか振動はキツくなる。そうか、これはしてやられたと、しれっと酒を飲む背中を思い切り睨んだ。

ふざけんな。あのオッサン、俺を騙しやがったな。全然呼び出し用のブザーなんか鳴らないじゃねえかよと、涙目で睨む。ただし彼は俺の視線に気づきもしないので、考えを変えた。

この中イキの状態に、追い打ちをかけるのは本当に良くない。そうか、上がスイッチを入れるボタンだとしたら、下にあるのは停止ボタンだ。きっとそうに違いないと、俺は慌てて手元のスイッチの下の方を押した。

「ふぎ——っ...！！？あ、あううううっ！！？」

ところが、事態は更に悪化した。下にあるボタンは停止スイッチなどではなかった。ぐいんぐいんと回りだした内部のでっばりに、俺はあっさり絶頂を迎えさせられる。ぐんと喉が反ったまま、快感のてっぺんから降りられなくなった。

なんてことだよ。これ、スイング機能のボタンじゃんと、俺は自分の浅はかさを悔やむ。でも、バイブと違ってスイング機能なんてそうそうあるもんじゃない。

だったらもう一回押したらさすがに止まるんじゃないかと、もう一度下のボタンを押した。

でもそのせいで、今度は会陰側のでっぱりにも回転が加わり始める。ふざけんなよ、なんでそうなっちゃうんだよと、俺はボロボロ涙を零しながら暴れるしかなかった。

「いやああああっ！！あああああもお無理無理無理いいっ！！とめ、て、こんな、あ、ああっ！！？」

半狂乱の俺は、止め方の分からないボタンを何度も何度も押しまくった。でもそのせいで回転や振動が変わるから、とうとう何度目かにイッた時に力が入らなくなって、ぽとりとどこかにスイッチを落としてしまう。シーツにぶつかったであろうそれを視線で追いかけたら、もう俺の手の届かない場所に転がっていた。

「あ、は、は、ッ、うううう...！や、だ、助けて、助けて...！」

自力で何とかできるかもしれない、という望みが全て断たれた。なのにエネマグラの攻撃力は上がっている。さっきから腰がひっきりなしに上下に揺れては、ぎゅううっと全身が突っ張っていた。息すら苦しいイキ地獄に、俺は心からの白旗をあげる。

「助けてッ！！助けて、北大路さ、ああああっ！もう無理ッ！！無理無理無理！ホントに無理いいいいっ！！」

「なんだよ、そんなデケェ声で呼ばなくても聞こえてる」

「来て、こっち来て、早くっ、早くっ！！」

自ら誘っていることになったとか、俺が呼ぶのはなんとなく納得いかないとか、そういう小さなプライドを競っている場合じゃない。一刻も早くこの状況を打破しなければ、俺は男も人間も止めることになってしまう。

切羽詰まった緊急要請は、さすがの北大路さんでも応じてくれた。スリッパの足音が近づいてくることにも、彼の顔が見えることにも、安堵が広がる。

ぐしゃぐしゃの俺を立ったまま見下ろす北大路さんは、腕を組んで俺に問いかけた。

「何？俺に何して欲しいの？」

「と、って、これ、エネマグラ、取ってえええ...ッ！！」

何をして欲しいかなんて、答えは決まってる。所定の位置を指させない俺は、みっともないと思いながらも腰を持ち上げて主張した。助けてくれ、俺を見たら一大事なのは分かるだろ。アンタだって、もう十分俺を苦しめたと見た目で分かるだろうと、必死に目線で訴える。

すると北大路さんは意外にも、ずっとベッドの端に座って、俺の頭を撫でてくれた。だから俺も、この拷問は終わりなんだと素直に力を抜く。彼の手が俺の下半身に伸びても、一切の抵抗をしなかった。だってその手は、エネマグラを抜くためのものだったから。

でも、ぴたりとエネマグラを覆うように手のひらを当てられて、眉を下げた北大路さんが鼻で笑ったのを見て、急に寒気がした。

「かわいそうな南雲」

彼が言った言葉は聞き取れたのに、正直それが何を意味するのか全く分からなかった。いや、確かに俺はかわいそうだ。社長命令で悪魔の監視を命じられて、自分が供物になったんだから。でもなんとなく、北大路さんの言うかわいそうと合致してはいない気がする。

分からない、どういうことなんだと、俺は口を開いた。だけれど疑問を声にする前に、ぐうっとエネマグラが奥に強く押し込まれたせいで、ガクンと身体が反り返ってそれどころじゃなくなる。

「あが...っ！！？ンッ、んんんっっ！！？」

「俺を呼んだら助けてもらえと思った？甘いよなあ。助けるわけねえだろって」

「っ、ッッ！！？」

さっきまではなんだかんだ、控え目に前立腺が押されていたんだと今はっきり分かった。ぐううっと彼の手を抑え込まれるせいで、会陰と前立腺、両方が刺激される。もちろん振動もスイング機能も消えていない。いきなりの快感に、視界が真っ白に染まった。ぼやけた視界のまま戻らないし、息ができなくて文句も言えない。

「あふ...ッ！！っが、あ、あ、あぐ...っ！！？」

「どう？初エネマは。いっぱいかわいがってもらえたか？」

「ひんぐんっ！！んは、はっ、あ、だ、め、それ、それええぐ...ッッ！！」

「声ガラガラで何言ってるのか分かんねえよ」

「~~~~っっっ！！！」

はは、と強者の笑みで俺を見下ろす北大路さんがやっと見えた頃には、強くエネマグラを押し込まれる時間は終わっていた。でもヒクヒクと波打つ腹は収まらないし、下腹部はずっと熱いままだ。まだイッてる、ずっとイッてると、俺は必死に首を横に振る。

そんな俺を上から眺める彼は、今度はあえてソフトにエネマグラを押さえた。かわりに優しく手をあてたまま、ぐるぐると回される。エネマグラ単体ではありえない動きに、ただ俺は気持ちよくなってイカされてしまう。

「いやあああああぐ...っ！！んんうっ！き、つい、まって、まって、イクから止め、あ、あっ、うううううっ！」

「自分でエネマグラのスイッチ入れたくせに、俺には止めろって？一人遊びの方がいいなら、お前ほっといて寝るけど？」

「やっ！！だめ、だめ、寝ないで、行かないで...！」

「我儘野郎め。俺に命令すんな」

いつだって俺様で自己中心的な思考の北大路さんは、俺がちょっとの文句を言うのも許してくれない。でもこの場において、俺を生かすのも殺すのも彼しかいないから、放っておくぞと脅されたら口を紡ぐしかない。けれどここは大人しくと思った矢先、彼が俺には届かなかったエネマグラのリモコンスイッチを手を取ったのが見えて、じっとなんかしていられないと目を見開いた。

「っ、それ...！うう、と、めて、キツイから、エネマグラ、止めてええ...ッ！」

「パッケージには、10パターンくらい振動の種類があるって書いてあったんだよなあ。もう全部試した？」

「し、らな、分かんない」

「なら俺が試してやるよ。南雲の一番好きなやつはどれだろうな？」

「んんああああああっ！！??」

エネマグラの詳しい仕様も機能も知らない俺は、あのスイッチにそんな意味があることなんてさっぱり知らなかった。ただ、別に知らなくてもいい。どちらかという振動は止めてほしいし、できれば取ってほしいのに。自分の興味を優先する北大路さんは、俺という実験台がどうしたら最も悶えるのかを確かめたくてしょうがないらしい。

「まずはこれが1個目な。次はどう？」

「ん、んっ、んっ、んんんんっ！！ん〜〜〜ッ！っは、は、んああうっ！」

「一旦スイングは前だけにしておくか。比べる時に邪魔だし」

「ッ、ま、前も！前も切って！」

「うるせえよ。じゃあ次3個目」

「ンふあっ！！はああああっ、つく、くう、ん、んんん~~~~っ！！」

北大路さんの言う通り、振動の種類は複数あった。自分で弄った時には驚きすぎて気づかなかったけれど、それぞれ規則性のあるパターンで震えている。ちゃんと強弱もあって、リズムカルにこまめに震える時があれば、一気に大きく強く震えては止まる時もある。そのどれも俺を追い詰めていくのには変わりなくて、振動パターンを1周しただけで俺は2回ぐらいイッた気がする。

「は~~~~...っ！は、は、は、はっ...！く、うう、ううう...！」

「おい、何へばってんだよ。どれが一番いいか決めてんだから言えって」

「ん、なの、分かるわけ...！」

「なあに、分かんなかった？じゃあもう1周やって確かめろよ」

「ふぐううううっ！！？んんっ、あ、や、もお嫌っ、またイクからあっ！！」

「じゃあさっさとベストなやつ決めろって」

「っ、これ、これが一番いいからっ！！」

「適当言ってるじゃねえよ。もう一回全部やってからまた聞くからちゃんと考えとけ」

「やだ、もう一回やだああ...！あああ、っ、ひ、う、う、うゝ~~~~っ！とめて、もお止めてええっ！！」

だけれど、ただ振動パターンを一通り試したら終わり、とはいかない。無茶な要求をする北大路さんは、どれが一番いいかなんて、分かりもしない質問をしてく

る。俺としてはもう、とにかくあと1周を耐えるのに必死で、どれが何個目かを考える気力は残っていない。

だから俺は3周目に入る前に、どうにか適当な数字を言って、また次のサイクルに入るのを阻止しなければと思っていた。ちゃんと考えたフリをすれば、俺が感じているのがどれかなんて分かるわけもないのだからと。なのに予想を裏切る天才の北大路さんは、更にキツイ3周目を展開してくる。

「ん～、2回試してみた感じだと…。南雲君のお気に入りはこちらだろ？」

「んああああっ！！？？ああああっ！ッ、～～～っんんんん！！！！？」

俺としては、てっきりどれが良かったかを聞かれるとばかり思っていた。だから俺の答えを待たない3周目が勝手に始まって、しかもそれが本当にどんぴしゃで俺の悶えるものになるなんて、完全にしてやられた感じだ。

まさか、しっかり観察されているとは思わなかった。無駄なところで洞察力を発揮なくていいのにと、俺は全身を突っ張らせながら絶頂してしまう。

「お、ほらほら、めっちゃ暴れるもんなあ。さっきもこの途中でイッてたろ？」

「まっ、ああ、コレ、っ、～～～ッ！！っひ、だめだめ、終わりッ！次のやつに、っぐ、んんん～～～っ！！！」

「わっかりやすい男。隠し事が下手でちゅねえ南雲く～ん？」

「～～～ッ、く、ううううっ！！！！」

小刻みな弱振動が繰り返された後、強く長く震える振動が2回。強振動から解放されたと思ったら、トントントントと優しく叩かれるような甘い振動の時間が、むしろ期待へと変わってしまう。だから思い切り強い振動で挟られた時、どうしても我慢できない。そうだよ、俺はさっきもコレでイッたよと、悔しまぎれの毒を心の中で吐く。

ただし少し前までは、淡々と別の振動パターンに変わった。こればかりを何回も繰り返される方が圧倒的に堪える。だめだ、何か別のモノに変えてくれと、俺は絶頂を繰り返しながら北大路さんに訴える。

「ひぎう...ッ！！あああ、い、く、から、イッちゃう、からあっ！は、は、とめ、て、これもう、キツいいいいっ！！」

「はあ？気持ちよくしてやってんのに、キツいから止めろって何様だよ。演技もできないくせに、一丁前に文句とはな」

「ひ、あ、あああうっ！！やっ、あ、だってえ...！ずっと、ずっとイッてんの、俺えっ！だから、だからもう、ホントに止め、てえええっ！」

「俺が俺がって、そういう態度がムカつくんだって。今も手加減されてるって分かんねえの？」

「あふ...ッッ！！！！っぎ、っ、———ッんんあああああうううう...！！！」

ただし、俺がしんどいかどうかはあくまで俺個人の話だ。だから自分の楽しみを優先する北大路さんからすると、鬱陶しい愚痴に聞こえるんだろう。そのせいで機嫌をそこねた彼から、止まっていたはずの中のスイング機能を復活されてしま

う。最も感じる振動パターンに、グリグリと前立腺を挟む動きまで重なって、その段階で俺のキャパは超えていた。

なのに彼は、ぐううとエネマグラを手で押して、奥深くまで侵入させてきた。あまりにも凶悪な快感に、バチンと一瞬意識が吹き飛ぶ。はっと目を覚ましたら、また奥まで押し込まれた。再び訪れる強すぎる絶頂に、意識ごと持っていかれる。

「んぐううううっ...！！っ、あ、あ、あ...」

「おいおい、おねんねが早いよ南雲。若いんだから根性見せろって」

「っぐ、ッ、は、あふ...！？っひ、嫌、もう奥は、あ、ああああああ
ぐっ！！??」

ぶっ飛んでは罵られ、不意に刺激を緩められて起きて、また過酷に責められる。それを繰り返されると、抵抗しようとか、文句を言おうという気持ちはほぼなくなった。スイッチを入れられると動くエネマグラと、今の俺には対して差がない。北大路さんの指先一つで、どうとでも動く玩具と一緒にだ。

「あふ、ッ、ふっ、ふうううう...っ！」

「痙攣やべえんだけどお前。イキ過ぎた？さすがにちょっとは休憩入れるか」

「あ、う、う、うう、っ」

ガクガクと縛られた手足が震えて、自分の意思では制御が不可能になったくらいで、どうにかエネマグラでの拷問は終わりになった。抜いてはもらえなかったけれど、全てのスイッチが切られて、大人しくなっただけマシだ。

なんて残酷な時間だ。普通、嫁の部下にここまでできるか？俺、そういう仕事のプロじゃねえんだよ？ただの一般人なんだけど？と、無茶ばかりさせてくる彼をぼんやりと見上げる。

「こっちはいい具合に育ってそうだし、そろそろ第2段階か？」

「...？だい、に、って」

「一か所だけ気持ちいいなんて、南雲もつまんねえだろ？」

けれども、俺としては十二分にイカされた実感を持っていたのに、北大路さんはここにきて別の場所にも玩具を使おうとしてきた。ふざけんなよ、つまんなくねえよ、だったらアンタが付けろと喉元まで文句がこみ上げてきたが、俺は出来た人間なので不満を隠さない目だけにとどめてやった。そして残念ながら、彼は俺の目よりも持参した卑猥な道具たちを漁るのに夢中なので、全く視線には気づいていない。心の底から遺憾だ。

「せっかくだしなぁ。次はこれにしてみるか」

複数の玩具の中から選ばれたのは、いったいどれほどグロテスクな見た目なんだと、俺は冷や冷やししながら北大路さんの手元を見た。けれど俺の予想に反して、彼が手に持っていたのはむしろシンプルな見た目だった。手の平ほどのサイズの

四角い箱から2本コードが出ていて、その先にパットが繋がっている。俺の知っている限り、低周波マッサージ器のように見えるけれど、そんなものを彼が取り出したりするものだろうか。

「な、なんすか、それ」

「これ？何か電气流す機械。今からこれをお前の乳首につける」

「はい！？」

ただし電気を流す機械という俺の読みは当たっていたものの、まさか乳首に付けられるとは。信じられない、このオッサンマジで変態じゃん、痛かったらどうすんだよ、乳首がおかしくなったら訴えてやるからなと無意味に胸を動かしてみたものの、可動域が狭いのであっさりと乳首を覆うようにパッドが付けられてしまった。

「ちょ、これ、痛かったらどうするんすか！」

「さすがに痛くはしねえよ。個人差ありそうだけど」

「俺にSMの趣味はないっす！」

「趣味は無くてもドMなんだから黙っとけ。ん〜、分かんねえけど一番弱そうなやつでいいか？」

「んひゅっ！？」

そして俺の同意を得ないまま、北大路さんが電気を流し始める。けれど猛烈に痛いのではないかと思っていたのに、それほど痛みは感じなかった。静電気よりも

更に弱いくらいの刺激が、パットを張られた部分から定期的に感じられる。気持ちいいとは特に思わないが、ピリッとした刺激の後、ちょっとムズムズする感じだ。

「どうだ？痛くはないだろ？」

「まぁ…。痛くは、ないかもっすね…？」

「まだ俺もやったことねえんだけど、電気を流し続けてると、段々乳首が敏感になるらしい。本当かどうか、お前で試してみるわ」

「はぁ！？そういうのは先に言ってくださいよ！？だったら素直に貼られなかった！」

「お前が嫌だって言っても勝手に貼るから一緒だろ」

だけれど、なんだ、これくらいなら余裕じゃんと思っていたのがそもそも甘かった。今はとにかく、後が辛いタイプの仕掛けが施されていたなんて。またこの人は俺の身体を魔改造しようとしやがって。変態め、このドS、鬼畜、絶倫大魔王と、吐けるだけの悪口を無言で投げつける。

全くもって自分勝手な人だ。相変わらず俺のことなんて何ひとつ考えてない。この人の何がよくて社長は彼と結婚したんだと思うけれど、俺ごときが考えたところで分かるはずもないので、俺はここで一度メンタルをリセットしようと試みた。

待て、落ち着け。俺がわめくほど北大路さんは面白いだけなんだ。だったら俺が大人になるんだ。一步引いた、殊勝な態度ってやつを身につけろ。そうだ、

いっそ第2段階に進んだってことは、第1段階は終わりなんじゃないのか？だったらエネマグラは取ってもらえるのではと、俺はすかさず交渉に出た。

「っ、あの、乳首は試してもいいっすから...！エネマグラは取ってもらえませんか？」

「はぁ？嫌に決まってるだろ」

しかしながら、あては外れた。こちらの我慢も限界だったので、盛大な舌打ちが部屋に響く。それを懲らしめるために一発だけかなりキツイ電気が胸に流されたので、俺はベッドの上で魚みたいに大きく身体を弾ませることになった。

「うはうゝッッ！！」

「元気いっぱいじゃん南雲君。休憩はそろそろ終わりでもいいな？」

「っ、は、い、痛いのは、無理なんで...！」

「まゝその辺は俺もわきまえてる。それにお前も、そろそろちゃんとかっちでイキたい頃だろ？」

「ひゅんっ」

強烈な通電が終わった後、俺の身体はどさりとベッドに沈んだ。それから息を整えていたら、北大路さんの手からつるんと亀頭を撫でられる。それは確かに気持ちよかったんだけど、新たな恐怖を俺に植え付ける。

北大路さんがその場所に触れたということは、だ。ピンポイントに前だけを刺激する何かを持っているに違いない。そして男性器を責めるのに適した道具に、俺はめちゃくちゃ覚えがある。

「使い切りなのが残念だけど、良いには良いんだよな、コレ」

マズいんじゃないのかと顔を青くして彼を見れば、手には真っ赤なオナホールが握られていた。ペリペリとパッケージがはがされて準備が整えられていく様子は、俺にとって恐ろしいことでしかなかった。

「や、めて、いい、いいから、もう十分イッてんの！これ以上余計なことしないでいいすから！」

「そんなに期待すんなよ。前使ったやつよりかわいい仕様だから大丈夫だって」

「はうううう...ツツツ！！！」

乳首の分はいいにしても、まだエネマグラは入れられている。この状態でオナホなんか使われたら終わると、中の前立腺が押されるのもお構いなしで膝をどうにか内側に曲げた。それでも手足が拘束された俺は不利に決まっていて、情けないほどあっさり、俺の熱がオナホールに飲み込まれてしまう。

きゅうう、と吸い付く中で、独特な凹凸が俺の熱を多方向から刺激してくる。全体が埋まると、先端の部分にあるコリコリとしたところに亀頭が擦られた。それだけでも気持ちいいのに、上下に動かされたら腰が溶けそうだ。

まずい、ヤバいくらいに気持ちいい。やっぱり男を良くするために開発されているだけあってモノが違くと、どうにもならない快感を与えられながら思う。

「くひっ、あ、ああ、あ、あ、あっ！」

「なんぼでも中に出していいんだぞ？」

「や、イッ、イク...！も、だめ、だめええっ！」

「ダメじゃないって。ほおら、ヌルヌルで最高だろ？我慢とか止めて全部出しちゃえって」

「んうう...！っく、あ、う、うう、うゝ〜〜っ！！ああ、で、る、も、出っ、あ、ああああああっ！！」

どぶ、と中に一発出すまでに、何秒持ちこたえられたんだろう。体感では、30秒も持たなかったと思う。でも北大路さんが俺を1回イカせたくらいで満足するはずもないから、イッても熱は扱かれ続けた。

しかもこの人の悪いところは、ただイカせてくるだけじゃないところだ。ころんと俺の横に寝転がると、片手でオナホを動かしながら、もう片手で俺の頭を抱えてくる。そのまま耳の横に自分の顔をもってきたかと思うと、まるで舐めるような卑猥な囁きが始まって、聴覚でも俺を犯してきた。

「んんほら、気持ちいい気持ちいい。気持ちいいの終わんないから何回でもイケるな？」

「っう、は、は、はう...！や、ぬい、て、抜いてええ...！」

「やらしい音がどっから聞こえてるか分かんないな。ぐちゃ、ぐちゃって、すごい音してる」

「はあっ、あ、嫌、やめて、もお、もおおおゝ...ツツ！ん、あ、あ、あああ...！
イツ、あ、あ、出る、また、また出るっ、つく、は、ツ、あああああっ！」

「エッロいことになってるよ。ケツもヒクついてて、自分でエネマグラ動かして感じてんだろ？」

「ち、がう、ちがう、そんなこと、ない...！っひ、か、ってに、勝手に、うごい、っ、あ、だめ、先っぽ嫌、あ、あああ、ンゝっっ！！」

「でもほら、またイキそう。ああほらイクイクイク...」

「〜〜〜ッ！！んううううんっっ！！」

北大路さんが言うように、俺はエネマグラからも攻撃を受けていた。特に後ろは、意識するほどに刺激が大きくなる気がする。なんならイキまくってぼうっと思考がぼやけている時に、しれっとエネマグラのスイッチも入れられた。突然始まった悪魔の振動に、俺の下半身がビンと突っ張る。

「ンはあっ！！？ああああ、だえ、これ、これイクから、おがしくなるからああああっ！！」

「もう十分ぐちゃぐちゃだよお前。でも喜べ。南雲が大好きなパターンのやつに
してやるからな」

「っんんんん！？ひっ、これだめ、イク、イクイクッ、や、あゝああああっ！
だ、め、両方、イク、ううっ、うううううっ！！」

「薬のおかげで出しても収まんねえだろ？よかったなあ、枯れない男は好かれるぞ？」

「くぅぅぅゝ...っっ！！っあ、あああっ！！はあああっ、あ、ま、また、も、ゆるひ、で、イグッ、んあ、馬鹿になる、イキ過ぎてっ！止めっ、ッ、あゝ
〜〜〜ッッッ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー